

墨縄の一道

関市 市村 孝之

令和という元号になってこの五月で一年が経ちましたが、皆さん令和という響きにはもう慣れましたでしょうか？梅の花を詠んだ万葉集の和歌が出典とされる新元号「令和」ですが、その万葉集の中に飛驒人のことが詠まれた和歌が二首あるそうです。そのうちの一首をご紹介しますと「かくかくに物は思はじ斐太人

の打つ墨縄のただ^{ひとみち}一道に」とあります。歌の意味は「あれこれと物思いはすまい飛驒の匠が打つ黒縄のただ一途に」であります。歌の中に出てくる墨縄とは墨壺の糸のことで、木材に直線を墨付けする時に便利な優れた大工道具であり、墨壺の墨打ちというものは建物にとって最重要工程ですが注目すべきは墨縄を打つ時の技があるということです。真っ直ぐで平らな木材にしか墨縄を弾いて墨付けすることができないのではなく、木材の形態に合わせて糸によじりをかけながら弾く事により線を引くことができるのです。技には名前があり、少し曲がった線を引く時に使う技が「よりずみ」。材の起伏に合わせて真ん中を少し上げた曲線にしたい時などは「はらせ」という弾き方を使うそうです。

さて私たち真宗門徒としていただく教えの中に「無碍の一道」というお言葉があります。これは「歎異抄」に「念仏者は、無碍の一道なり」と出てきますが、仏の智慧のはたらきを抛り所とさせていただく時、自らのはからいを超えて、我が身の事実を真っ直ぐに受け止めて生きてゆける、そのことがお念仏によって開かれるということです。墨縄の一道も、材が曲がっていようが起伏があろうが平らであろうが、墨縄の方がそれに合わせて線を定めてくれるという事からすると、それと同様に、仏の智慧のはたらきが、そのままの私で救われていく道が

ご用意済だったのだと気づかせていただく時、墨縄の^{ひとみち}一道ならぬ「無碍の一道」が定まり開かれた世界が姿を表すのでしょうか。自分自身で身を正し切り開いてゆかなければ仏に救われないのではなく、仏の方から救うぞという願いの道が、こんな自分にもすでに届いていたのだという有難さを日ごろ御同朋御同行との聞法生活の中に感じ得ることができれば、本当の尊さに目覚めてゆけるのではないか、そんな歩みを喜びとして生きてゆけたなら、なんと素晴らしいことでしょうか。

なかなか領けていけない身ですが、新しい時代「令和」の一周年を迎え墨縄から知らされることであります。